里見八犬傳　第九輯　巻十九

特
イ 旹 4
600
261

曲亭翁編輯

八犬傳第九輯下帙之中

柳川重信畫

江戸書林文溪堂精刊

南總里見八犬傳第九輯下帙中巻第十九簡端贅言

本傳ハ文化十一甲戌年第一輯五巻を綴り創しより今茲天保八丁酉年に迨て、凡二十四の春秋を歴たり。其間作者の腹稿或ハ流行に據り或ハ昨の我に厭飽て趣を易文を異にして體裁同じからざるもあるべし。そを何ぞといふに始ハ只通俗を旨として綴るに敢奇字を交ぜず。この故に行毎に假名ヲ付して真名寡し。六七輯に至てハ拙文唐山なる俗語さへ抄出載て且意訓をもて彼義を知らしむ要あれバ所為に似たれども世に獨学孤陋にして唐山の稗史小説を讀まく欲する諸生あらバ其が筌蹄ともなれかしと思ふ作者の老婆親切なり。さればとて行毎に真名ヨミをくるをて字の數さへ覺ゆ始に弥増たり。抑曲学にて要なき書を好みてヨミく綴りたる余が如き者せ文ハ早表半裏の筆に成れり。そを知ざるにあらねども畢竟文字なき婦幼の弄びにまゐらする技にあれバ故りて風流たる草子物語ハ取て吾師と倣ふべくもあらず。又彼唐山なる稗官小説の大筆にして奇絶なるもその文ハ模擬に要なし。然ばとて坊間に寫本にて行るゝ軍記復讐録の類なるハ俗の看官も歩かわざる

べく。余も素より綴まく欲せざるの故に吾文は枉て雅なるも俗なるも又和なるも漢なるも駁雑
杜撰の筆をもて漫に綴り創しより世人謬りて遐げ棄ざる中に本伝は甚しく時好に稱ひて
憶ずも一百四五十回の長物語に做りにけり。ある年来吾机案上の子夫に憖に切磋琢磨せ
る。自得の戯墨なるものなからかくの如くにあるなれば唐山なる稗説の趣を寫すに由なし。然れば彼は文
華の国なれば俗語といへども出処ありて悉く字義に稱へり。但正文と異なる所以は其用同じからず
よりあり。譬ば正文に慚愧といへば即恥るの義なるを俗語にては且烝しといふ義にも用ひたり。又工夫は考
索思量の義なるを俗語にては空虚閑暇の義とせり。工は空の省文にて夫は助語なれば即空なるを
めく。俗語の和訓はその処によりて異同あり。然るを原を極めずして此間に抄録せる俗語をのみ見て
取用ひなば大く義理の違ふことあり。筆の次にいふ。二ッなれ水滸西遊などに在を於の如く像を如く
似のごとく則を唯のごとく読まするは其文に法則あり。叨に用るにあらず。似を読て如とするは似飛に涯り
則を読て唯のごとくするは不則一日に涯り、像を読て如とするも如之といふのみに用ひず。況教の轉

是を叫て做る。撒尿の轉して鳥になる。（人を罵る時にいふ）底の轉して地に做り又轉して的になれる。一朝に
解盡すべくもあらねバ我大皇国は邈古の久しき世より、もはら言魂を宗とあがひぞ。文字の製度を
あらざりし。應神天皇の御時に初て漢字を傳へしより後の世に至りて人の詞は多く源氏物語など
どよまする音訓を仮る文なれバ、爰も後々まで和漢駁雑の文章の必らずまかるべき勢ひえ（太平記などを見て思ふべし）
そも又一轉して仮名文に唐山の俗語さへ諳記の随取用ひなば、余が為世文と国学及漢学の博
士達倘その眼に觸るゝもあらば、その駁雑を嘲嗅ふて云云とのたまふべけれん。遮莫唐山にも俗語の多く
綴まる書に正文あり方言あり。あるが中に俗語のみを用ひざれば文儒書方書佛教は正文なるべき者なれども
その中に俗語あるは二程全書朱子語類俗語をもて綴りしは奇功新事傷寒條辨虚堂
録光明蔵の類なほおほかるべし。先輩既にその辨あり。然れば彼が文華なるも言魂の資を借ざるべ
文を成すに如意ならしむ。剏亦大皇国の文章は和漢雅俗今古の差別ありとも然るを今文場に
遊ぶ者熟かくの如く貫通せんことかたしとも難ずるにあらず。意ふに古昔の草子物語竹取宇通保源氏

物語などの作者勉て其詞をあながち撰でのミ綴るにあらざるべし。必是當時大宮人の常語なり言さへぞ隨に載られど古言ハおのづから鄙俗ならず且宮嬪の詞ハ雅俗ち任しぬるあれど。海人の藻苅及眞淵の草結など思ふべし。才子才女ハその品殊也且能文の所為なれバ後世和文の山手ても僅れバ昔其草子物語ハ此に由俗語もて綴れると思ふべし。和漢其文異なれども情態をよく寫ねて其趣を盡せる者俗語をもてすれバ成まじと難ぶ彼我同く一揆なり然バとて今此間の俚言俗語の轉訛侏離の甚しきをぞ儘文にするもべからず。余が駁雑の文あるハその侏離鄙俗を遁れんとてよなり近世建部綾足が西山物語及本朝水滸傳一名吉野物語。ハなべて古言もて綴るものから就中本朝水滸傳ハその趣淨瑠理本とふものに似たる條あり。今の俗語もまじへたれバ木に竹を接る如し。且時好に稱ざりけん僅に二編にて果ざりけり。○第二編ハ寫本にて傳ふ。又村田の翁が筑志船物語ハ今古奇觀第二十六なる蔡小姐忍辱報讐 柏案驚奇にも此と相似たる物語あるぞの文同じからず益別話 といふ一編を。皇國の故事に翻案して古言もて綴るのみ。然しも能文の所為なれバ必初学の為に資助あるよしなきもあらむ。惜むべし。翻案半分也。翁ハ

纘貨を易ふのみ。門人に續出る者ありて原本の局を果せしと吾一知音ハ呟たりけり。その國学者流也且和漢の稗史さへ愛る餘力あれバなるべし。さればとて俗の看官ハなべてその書を知るもの殆稀なるを廣からざるハ勸懲を旨として書讀むるを好ざりける世の婦幼ゆもよく讀まるハ余が如ぎ者ゆゑにやあるべらん稗官野乗ハ鄙事是を好と思ふなれども本傳結局遠からねバいで己んハさいかやあらめ筆を費して百年以後の知音を俟べく今より後の嘲哢議論を解ずとおもふなるのみ丁酉の秋八月念六日東園黄白の木屋花馥郁る南檐の下にありき著作堂の癡老

蓑笠漁隱

附て云前板第九輯下帙の上にも巻毎に校訂の遺漏あり書賈が發販せし後にそを見出しぬ因て左に録して以て遺忘に備ふ。

○前板第九輯下帙の上 十三之十四より十八の巻に至る 五巻重訂追録

是より下ハ第六頁の端像の左に續れたり。験しあるべし。

南總里見八犬傳第九輯下套中摠目録

九集　第
四版

卷第十九

第百二十六回　假捕使三路行兵　義兄弟兩林懲惡

第百二十七回　丶大庵尼親兵衛喪伴　石菩薩前信乃悟應報

卷第二十

第百二十八回　犬士露宿迎追隊　老僧褰袱示冥罰

第百二十九回　忠僕事死靈佛起本　孝子去京傳燈法脈

第百三十回　里見侯白濱葬旅櫬　大法師穂北果客情

卷第二十一

第百三十一回　八行靈玉丸增良主　九歲神童氏請花營

卷第二十二

第百三十二回　金碗無後更有後　姥雪失望反遂望

第百三十三回　哄客船水寃鬼沽酒　没波底海龍王剌仁

卷第二十三

第百三十四回　苛子海中與保探千金　蕃山窮難照文逢一將

第百三十五回　渥美浦便船送紀二六　管領邸禍鬼抑親兵衛

八犬傳第九輯下套中摠目録終　下套下近刻當至大團圓焉

小山大夫次郎
将種自賢
賞罰法天
賛成朝
結城判官成朝

賛浄西法師
敲僧浄西
兇僧徳用

棄却顕職
富貴聚身
人間孝子
釋氏忠臣
賛僧正影西
六道山
能化院
教王寺本堂建
渥美郡領
隣尾伊近
權僧正
影西

今純友
査勘太
汝是西濱漏網魚
豈知東海有余且
海龍王
修羅五郎

第九輯下帙ノ上十三之十四
二丁ノ左總目録 愆 カケたり且つけるなし 愆 ノ如し同 五行 九丁右 態へ 誤字也 同 九行 九丁ノ右 老温 温ハ誤字 當に 嫗に作るべし 同 五行 十六丁左 竹塚 字を脱せり 竹のつかとすべし 同 十行 廿丁左 稱え カケたり つけるなし え ノ如し 同 十一行 廿七丁右 向て カケたり つけるなし よ ノ如し
同 左六丁 三十丁ノ表 王 カケたり 主 ノ如し 同 左七行 三十丁ノ 犢鼻褌 カケたり 褌 左のつけるフンドシ ノ如し
〇十六の巻 十一行左 題目 窂 誤字也 當に 牢 に作るべし 同 右七行 十六丁ノ 冲り つけるなし ひいノ如し 同 右五行 十八丁ノ 妖僧奴 なり 僧ハ誤写 當に 尼 に作るべし
〇十七の巻 七行 三丁ノ左 聽 字誤 廳 なり 同 八行 八丁右 稻城 誤字也 當に 稻村 に作るべし 同 二行 八丁ノ左 浮浪の身 身ハ作者の失なり 當に 人 に作るべし 同 初行 十三丁ノ右 件々 字誤 條々 なり 同 初行 十七丁ノ右 召復さる つけるなし めしかへ ノ如し 同 七行 十九丁ノ左 掂 カケたり 點 ノ如し 同 二行 廿四丁ノ右 歷 つけるなし れき ノ如し 同 六行 廿六丁ノ右 昨日 なり 作者の失 當に 前日 に作るべし
〇十八の巻 二行 三丁ノ右 徳 カケたり 徳 ノ如し 同 十一行 六丁右 世よ 世の字紛らわし 世よ ノ如し 同 初行 十三丁ノ左 四 なり 誤刀 匹 ノ如し 四の如しきハ畧せ
又按するに第九輯上帙の自序 五行 二丁ノ左 野山中狼之介とあるハ暗記の失也 野山中 當に品河に作るべし 又第五輯より処々に出する上野の白井へ土呼なるよしを越後人牧之に忠告せられき 然ば井ハ助字也 假名ハ違ど本文白井の傍訓あるとあるべし 實ハ白一字のよし也 井を活字とすれバあるべし
前板重訂抄録終

南總里見八犬傳第九輯巻之十九

東都 曲亭主人編次

第百三十六回 假捕使三路に兵を行る 義兄弟両林に悪を懲す

復説堅名與司經稜根生野飛雁太素頼ハ郷尚に逸匹寺の客殿にて住持徳用が意見に儘して。長城惴利們と三隊に分れし。緝捕の計議に違ハず這隊を則寺の悪僧陸繹坊堅削を先鋒として從ふ僧俗二百五六十名、大庵を投て推寄来つ。既にしてその間遠くもあらざる程に正に去向の茂林の中より黒烟立弁りて猛火の光見れけり。當下堅削眼早く原来那奴們我の間に狹這方の機密を猜しけん。やよ衆兵毎那を人よ目今庵を自焼して他郷へ走るにぞあらんず。ら捕る逊して皆急ぬねと聲高やかに罵示して連りに找む程しもあらず憶ざるに東の茂林に一行の句を寫ぜし旗三四

曲亭文庫

旒樹の間に在り。曇雲勝る四月の天の雲餘波なく吹拂ふ風のまにく閃めく思ひかけずや敵も亦二隊に別れし先景に堅削疑訝りて隊勢を制めて左右なく找まず。後陣を等て意見を問ふに經稜素頼も亦これを相て躁ざる氣色もあらざりけかりにて經稜ハ馬上に堅削をよびていく。御坊ハまづに狐疑あふる那首に旗のなき乱ハべく竄れる敵のあるべしや、大ハけるゝ集合し奴們這方の軍議を覰着りん苦悉隨の拙策のミ那ハ奇兵の術にて東の茂林にも敵居ず竄れりと思ハせて寄隊を住めて幵が間に落延んとてそ計りけめ。鳥滸なるをと冷笑へバ素頼然りと點頭てその議寔に違ふべうもあらず。非除、大の施主なるものが安房の里見の家臣でも十餘名に過ざるべしに由縁もあらぬ這地に来て火急の難義あればとて誰を憑て加勢にせんや。といへバ經稜然バとよ。推量明白なる上ハ東ハ要なきに似たれども萬に一の與るれバ堅削御坊ハ東へ向ふて敵の虚実を撈りあへ猜する如く敵あらざれバ疾く隊兵を這方へ找めそ。

庵の邊に在る敵の尚退らで戰ひ剛くバ急く横鎗を入れよ。その必勝の捗なるんとらすを堅削らち听てその議ハさることなれども師父の軍議に任せられて拙僧先鋒に找しと敵なきらんと思ふる東の茂林へ立別れてうち向んハ本意にあらずと推辭めバ經稜焦燥て幵ハ亦無益の議論ぞ。今ゆく這里にて役不足して時を移さバ敵ハ皆思ひの隨に逃亡てん。和僧尓まづに思ひなバ洒家東へうち向ん。然バとて多勢ハ要なし。我伴當と列卒毎と莊客們ハ三が一ッ相別まて從ひ来よと辭急迫しく宣示して猛可に二隊を引わけて東へ馬を早むれバ始よりして戰ひを好ざりける莊客們ハ敵なからんと思るゝ東の茂林にそ得意なれと思へバ定の數に錯ひて我もくと經稜に從ふ者のミなりけれバ堅削が隊に隷て來ぬる子院屬寺の法師武者も亦二の足を踏もあり。是們ハ是出家なるに今剛敵と戰ふて分捕功名されバとて武名を傳ん子孫ハあらざるに所領の主にあるにもあらぬに可惜命を的にして敵ある方に向んより東へ向くまそよかめれと一人がいへバ領くあり甲に耳語ひに亦ましく得へて經稜が。

馬の尻提に影計別に素頼堅削聲昔立て鈍や兵毎步違へし狹然しも要な
𛂞東の茂林へ若們までゞゆくと狹這方へ來ぬやと喚れば素頼が列卒伴當們も聲を
資て喚禁れども步段態して感步早に走る者ぞなかりしが素頼も堅削も呆れて
一霎時長觀て在りぞが中に堅削は肚裏に思ふやう咱一朝の怒りに乗して法敵
なる、大們を摘捕まく思ひしが既に先鋒の頭人たるに今憶ども影計別して隊
勢寡くなりけり。這隊の捧し心許なし我も東へ適ん不如と主意して猶呂音に
焦燥る面色なり。素頼にうち向ひて見ゆる如く莊客們も我黨も足が一ッて步違へ
けん大方ぞ這の隊を離れそうん軍令を聞ぬに似て不便なり拙僧も疾く赶蒐て皆悉領て
來てん。身は徐に馬を捗めて頭陀が庵に推寄せ拙僧程なく赶て來て後陣に續さく
新隊とりて相資ひてんとらに素頼頷きてその意に任すべし。赶蒐ぬと答る間に堅削は眉尖刀
肱腋に引着て飛が像く走去けり。介程に素頼は堅削を目送りつ。猶しも舊中に在りけるに。

東の方は處々に榛樹嫩杉ヲヌれば往くも還るも見えざりけるを久しく待る隨に心のみ焦
燥て左さま右さま思惟るに隊兵寡くなりしかど尚八九十名は這里に在り幷も堅削們が還
るを待て時を移さば躬方の虚實を敵に知られて頭陀們は遠く逃亡てん介ならん
ば我さへに怯れりと經緯ゆも又惴利ゆも笑れん敵は他御の旅客なれば骨ある奴們は七八名狹
十名に過ざるべきを我隊兵に比すればヨヌ寡の知れたる敵なれば克ずといふことあるべからずと尋思をな
して隊兵們に支度々とおそろぬまでて、大庵へぞ推寄ける。その折までもなほ滅ぬ敵の自焼の焰
に迷ふべくもあらざれば、大の庵へ近着程に早一町に足ざる所浩処に能化院の星額長
老は逸足寺の衆徒と城の士卒と和解て無事に扱んとて九個の徒弟を相倶して走りて前
面より來にけるを素頼はまで佗とて那奴們は何でもあれ、大を幇助し禿驢ぞ法會を
果して還るなるん遣るな逃して摘捕れ一個も漏すべからずと劇しき下知に逸足寺の悪僧們は
皆逸早く兼り呀と答も果ず士卒に先たち突然と走り蒐れる鷙鳥の勢ひ當るべう

もあらバ星額長老徒弟們ハ駭慌る聲戰しく。あな人々理不盡之惴そ踈鶻
るなあひそらふよ。とあど叫べども耳ふも被ず轂を倒し。或ハ蹴返し突跌俯して一個も餘さ
ざ犇々と捕索被てぞ牽立る所場勇しかりけれバ素頼親ハ懽びて壓よや法師達で
かしこう。その賊僧們を這頭ふ置ハ、大們を搦捕る折ふ脚を寅縁ふあるべらん今來し方ふ
牽退けて両三人してよく衛りね由断してそをふ復されそと。ふ悪僧們あてゐて牽立ん
と欲するふ星額師弟ハ云云と勸解て毫も身を起さねバ罵り怒る悪僧毎果しなけ
ればか十個の法師を一個々々ふ攫抓む膂力自慢ふ十個の肩ハ米苞の像くうち載て被
擔連てぞ舊路ハ撲聲揃てかへりけり。當下根生野素頼ハ隊勢を找る樹梢の間
より庵頭ふ近着て前面を佗とうちみれバ尚燃残る猛火を背ふ十間許前ニ出て
雙立る勇士あり。是則別人ならぬ道節と毛野の二犬士之左右ふ従ふ両個の殿兵も
各持る捍棒を或ハ突立股挾みて来れる者ハ是誰ぞやと問せも果ず根生野素頼

騎馬苛めし兇聲も尖鋭く。若們ハ那礼島蔚の僧俗近曽這頭ふ庵を締びたり。嘉
吉のむかし戰殺れたる列將士卒の菩提の與とて。人の憑ぬ念佛三昧法會の今日ふ及ぶ
まで。國の守なる結城殿ふ云云と請稟して。古今の免許を兼たり。況這地の大刹なる逸疋寺ハ
その義を告て衆徒の幇助を借んと欲せず。貧民乞児ふ施行なして恩義を示すも寄怪なる
ぞや。意ふ是若們ハ隣國の間諜兇欲命なる歟。謀叛の奸賊なるむ搦捕て領てまゐれとある。
當館の御諚ふ依て根生野飛雁太素頼が來つる。似而非頭陀ハ、大なる那里ふ在。今日捕
隊の頭人ハ只我一隊のみならず我同僚なる両勇士長城枕之介惴利堅名衆司經稜們も
隊兵並ぶ逸疋寺の加勢の大衆を従へて八隅隈なく捕稠れバ水も漏さず火をも焼せバ然バ
、大を資ける十個の賣僧ハあれらのやうし知りる狡猾せし狄逊んとて我馬前ふ撞見
走れバ一個も漏さず搦捕りて後陣ふ在り先途を知らバ一個も遅ずく出て馬前ふ跪きて。
索ふ被れと喚れバ道節呵々と冷笑ひて憨念入なる長談義ふ今ゆら答んハ大人気なる

けれど惑ひを釋んとて听ね。柳生士追薦の念佛供養の願主なる、大法師ハ無慾にて。素より名利の與ならねバ。當城主に許て免許を請んとのみもあらず。况這地の寺院に告て。幇助を借りて何にかせん。且兼愛して普く済に施ものハ佛の慈悲なるに疑ふべうもあらねバ。約莫今番の法莚ハ和郎們が先君氏朝主の菩提の為にも干りくれバ。歓るべき筋なれバ。余罪あるを放ちてくるゝと詰れバ毛野も詰を續て既に搦捕られしと哭く。能化院の長老師弟ハ、大法師の舊識ならねど善に與する心のみ。昨今来會たるのみ那身に犯せる罪なければ逃も躱れもせざらんに非道の索に被らるとも我們にも一刻に思れなバ後悔あらんといへバ道節聲耳より立て。唯那十個の僧のみならで、大庵主も我黨も罪せらるべきものならねバ。徐も来意を知まく欲さに庵主の伴に立ぬして姑且和郎們を欺きてありける是なる両個を誰とか思ふ。安房の里見に由縁ある八犬士のそが中にて今ある者ありと知られたる。他ハ則犬阪毛野我ハ犬山道節忠與なり。解ても听れよかし弓箭採る身の常態にて引ハ返さぬ武士の意地本事を

なせん爭何ぞやと理り譴る両個の犬士の然しも雄々しき勢ひに素頼計較翔に違ひて侮ろく思へども勇勢を肩らして毫も猶豫せず。噫嗚呼児們が嗜たり辯舌人を惑すとも。若們ハ是里見の與に事を法會に假托て竊に當城の虚実を覗ふ情使なるべし。言語の端にも顕れたり。兵每搦捕ずやと劇しく隊勢を揉れバ群立散動て爪を張る猫も釋氏も共侶に御詮ぶと喚り叫で競ひ蒐るを道節毛野両個の𩊱兵も棒をとりて打拂うち拂ひ毫も寄せず雜倒も修煉に透間あらざるなれバ寄隊ハヨヌなもそのかひなく。いろめき噪ぎて逃んとす。素頼ハこれに駭き慌て道節毛野を射て仆さんと思ふ箭坪を量りて弓に箭剌ふて弯絞る那時遅し這時速し。後方に一個の犬士あり。両個の𩊱兵を從へて樹蔭を出る聲高やかに根生野素頼無礼なせそ。八犬士の随一人犬村大角ここに在りと下馬せて命をとれやと罵りながら白樫の棒もて馬の後脚を撥刺哩托地と薙折けバ馬ハ一聲嘶なあへに究屏風を倒すが像く主共侶に俯臥りて死活ハ知らず平張けり。詰分両頭介程に。

大角一棒人馬を倒
現八僧俗二虜を牽く
大角
現八

堅名衆司經稜ハ樹間に敵の旗のみえたる東の茂林へ推寄て。肇て後方を見かへれバ。
御曹に定めし人數になぞらひて從ふ隊兵多からざりけれバ。ちと甚麽と訝りてその義を問まく思ふ
程に堅削も亦走り来つ。端を定めて桟寄りて經稜に報るやう。鄕曹の事お勢の多寡を
定めて三分二ッと宣ひしを。兵毎が皆誤て莊客们さへ法師武者さへ多く從ひ来にければ。
三分二ッを這隊よりも拙僧他们を喚返さんとて。躯て追蒐ひしかども馬の最早け
ればぞ遲着きて這里より到りぬ。不便なれどもあらねども。今領て還らバ六日の菖蒲那
里の期にあはざるかの條。這頭の敵を撈りて旗のみ見るバその多人數なく根生野
主の後勤ハ勿論捕漏されて逃ると提バ好獲もそのかぞ拙僧ぞ伴仕らんとの議に
儘せ給ひぞやと。己が怯を塗秘し舌も旋るや蔫躪刷毛よ吐く巧言を信容る經稜
屡點頭て然ば這里より返しき遲くも我主意も其頭に過ぎ素頼小勢にすべしといへども。
為一百個ハ隊兵なからん且他が武藝勇悍我と惴利们に伯仲もすべし不覚の掙なきにもあらねバ。

那里の事ハ心安かり先當要ハ這頭なる敵の虚実を撈るに在りと思へども爭何せん樵夫の
かよふ路のみにて繁茂り粒なる松柏の枝を交返處もなければ。騎馬の進退難義なるべし。御坊ハ先
鋒の頭人なれバ勇僧もあれ猛卒もあれ五七名を従へてはけ入りて隈もなく渉獵ばゞ敵の有
無を知らん。那奴们倘切所を眉そて盾籠りてあるならバ驅出して戦ふとも御坊们都て身
單の功名を貪らで陽走して敵に趕して誰引出まをを妙とせよ。その義を忽にそと心屬
為ば堅削ハ好しからぬ所なれども今さら推辭むことを得ぞそろそろて叫と答て躯て退
出て心鬼相似る悪僧五六名を伴ひて各持る眉尖刀にて去向樹悒る樹の枝を撥分けつ
亦推抗ら敵を索めて窄くも深き森にぞ入りける。恁而堅名經稜ハ隊勢を分ちつ。那
這なる樹の蔭に埋伏させて馬を駐めて堅削们が敵を惹寄するやとて待りけるに久しくなる
まで影だに見せざれバ且訝り且焦燥て只得馬より下立ち我みづから渉獵んとて躰し置たる
隊兵を咸召よし。意見を示して馬を牽して前後に立して入る茂林ハ鳥路熊徑

文溪堂蔵

苔滑ふ樹下闇くて。辿るふ辿り易からぬを。左右して両三町。来ぬらんと思ふ程ふ其頭なる樹の下ふ人ありて。やよや人々救ぜや助けよりと叫ぶふぞ。経稜も隊兵も噫とたゞちふ咸駭ぬく。覩ればこれ是別人ならぞ。郷冑ふ斥候ふ遣らるゝ堅削並ふ同伴の法師武者さへ五六名藤蔓をもて結極られて一個も漏れぜ老樹の幹ふ縢着られてありけるかば。いよ〳〵驚て経稜ハ怖れそ隊兵都て膽を潰して故を問ふあり評まるあつて拘擇ある聚合噪ぐを。経稜急ふ叱禁めて兵毋鳥滸なる口を唔そ。先那索を解捐よといはれて大家阿と応て間近く立る隊兵們が腰ふ帯たる匕首をもふく抜て堅削們が索を截棄んとせし程ふ前後の樹蔭ふ敵ありて咄と鯁る鬨の聲谺ふ響きて多少を知らぞ。突然として顕れ出る這里ふも三個の犬士の武者聲犬川荘介こゝふあり。犬田小文吾犬飼現八茲ふ在りと名告被る武威胆勇そのゑふ従ふ夥兵們ハ絶ふ四名ふ過ぎれども。士卒一致の進退烈しく面ふ顕れ背ふ靡けく短兵急ふ拉ぐ奮勇正ふ虎をもて羊を駈るふ異ならねバ始よりして闘戦ふ心なき荘客們ハ。まづ

近くハ棧まで在りしふ目今敵の鬨の聲を聞くより呀々と驚怕れて嶮を衝て逃しるべ。誰ら駭慌ざるべき。逸疋寺の悪僧們ハさら也経稜が伴當列卒さへ軍旅ふ熟ざる者のミなれバ。敵の多少も知らざれバ皆只命を免れんとて樹間を潜り路を求めて走りもあへぞ樹の根ふ跌え或ハ背ふ續く者ふ壓倒され踩躙られて。剰え三犬士の夥兵們ふ生拘るゝも多かりけり。其が中ふ経稜ハ走る躬方を罵辱めて復せ戻せと喚りつ憶ぜも退後をしを現八横ざまふ衝と寄て刃を丁と打落し。組しもやらぞ中一中て三間あまり投しかバ経稜ハ老樹の株ふ膝を打せ阿と叫びて又起べくもあらざりし。犬士の夥兵們走蒐りて索を被て牽居ける。登時荘介小文吾も現八が今ふえども拳法の精妙なるを感し賞て倶ふ経稜を責て。さればこそ鳥嶽の小人悔しかるべし爾ハ結城ふ由緒ある家臣親の忠死の賞として。童職美禄を貪ながら放辟邪侈ふして理義を思ぞ。心術相似る同僚の毎人根生野飛雁太素頼長城梳之介惴利と共侶ふ逸疋寺の住持徳用その徒弟堅削們ふ唊誘されて。大庵主の念佛供養を非義

と娟て君命と偽唱へ、僧俗烏合の多人数にて、我們さへに推並て搦捕まく欲りしぬ。その
計較の趣は、人の告るに知りぬるが、今又悪僧堅削們の招にて、その詳なるよしを聴ぬれば、知ずや那悪
僧們は、介が與に倅候て、漫に這頭へ来つるを、我們既に擒捕て、爾しとぞ思へかし、今は
に不及ざれども、大庵主の念佛供養は、若們が先君先父の菩提の為にも干れば、相歓びて一臂の
力を資んとてぞかし、斯てもなほ其を告ざりしを罪として、讐敵の思ひをなす、抑何等の心ぞや。忠にも
あらず孝にもあらぬ、冥罰訓誡に覿面なるは、其身々々の亡君亡父に叛きし祟にもあらんずや、悟ても陳ぶる
よしあらや、甚麼ぞやいかにぞや」と迭代に責問へども、経稜は折傷の痛楚に得堪ざりけんものいはず。
當下堅削們の悪僧は、倶に蟬聲戦して、犬士達と共に、允させ給へ。我們も住持徳用の指
揮に依りて已ことを得ず、當隊に加りしかども、只懲さんとおもひしのみ、真実大人們を撃捕んと欲
せし悪心はなし」と、勸解れども、亦経稜の伴當列卒の生拘られしも、咸跪きて額を衝て、異口同様に
陳するやう、喃刀祢們、少し召せ。小可毎は、這回の計較には、毫も干らず、情由をも知ざりしを主

命なれば是も非もなく相従ひてゆきしのみ、賢査を給はれかし」と陪詫つゝ、連りに説くを。
三犬士は、みなまで聞ず、杣木の株に尻を掛て、荘介が談る由、犬田犬飼はかくと思ひつゝ、堅削們が
招に據るに、兇徒三方に向ひたる事、既に分明なるは、心許なきは、大庵主の安危のみ、供養塔
所に快立かへりて、犬山犬阪犬村們と一隊に做りて、庵主の跡を趁て、犬塚に力を勠せん、今の
急務は是のみ、とはいへば小文吾點頭て、そは勿論の事なれども、這生口們をいかにせん」と问ば、現八
聞て、そは開も商議に及ぶべからず、一個々々に首を剣て、後安くせずもあらば、逃る奴們がかへり来て、
被る索を解んも知るべからず。然でも盗に糧を齎し、仇に刃を借すに似て、是禍を貽すなるべし。その義を
思ひねかし」と勇むを荘介推禁めて、否如右せんは易けれども、大庵主ならぬかれよりあり、厥に咎あり。
大江親兵衛は逆将素藤を征するに、折兇徒を一個も殺さずして、全勝の大功あり。然るを這生拘
們を殺さば、庵主の誨に違ん。但経稜と悪僧們をのみ、供養塔所に牽もてゆきて、犬山犬阪犬
村們に示して、衆議に儘しなば、可なる術もあらんかし」と諭せば、現八感服して、その議定に精

妙々約莫今番の鬪戰ハ。他們が妒忌の奸虐のミ我より做出しゝ事ならず。今一朝の怒ニ乗じて。
殺さバ他們が主君なる結城氏と怨を結バん歟。然でハ里見殿の為に宜しからずと思ハざるべし。我ハ
から短慮なりき。嗚呼術なしと諄返しつゝ他事なけれバ。荘介小文吾再議ニ及バず。四個の隠兵ニ
ありけるを。經稜堅削們の生口を牽立よとていへバ。經稜ハ撲傷ニ悩て一歩も運び
得ず。堅削も亦生拘られ。折片足を折れたる故ニ立ざる。輒くもあらねバ。鄕ニ經稜が牽せる馬
も既ニ分捕せられて。繋て樹下ニあるをもて。隨即件の僧俗とその馬ニうち乗せて鞍ニ縢附る
荘介們これを見て。二ッ三ッ隠兵ニ下知しつゝ。その餘の生口ハ是皆没々の雜兵なれバ。その
侭ニて棄てもなん。但那侭ニ閣くまじとて。鄕の樹間ニ植させたる涅槃偈の旛をはやく採卸
して旛竿よりなる隠兵們ニわたして。僕のごとくニ做しけり。有恁しかバ。荘介小文吾現八ハ。經稜
堅削をうち乗せたる馬を真先ニおしたてゝ。その餘生口の悪僧を。隠兵ニ牽せ路をいそぎて。
塔所の茂林ニかゝりける程ニ。道節毛野大角ハ。根生野飛雁太素頼と。その隊の僧俗数名

欲ずして生拘られけるを。茂林の樹の幹ニ繋して。荘介們の二犬士詳をきゝ笑ふて在りしかバ。迭ニ
鬪戰の趣を箇様々々と解示して。倶ニ笑局ニ入りにける。弁が中ニ道節ハ思ひ假討ぬれバ
頭人なる素頼と經稜ハ。犬村大角ニ生拘られて。這頭ハ敵なれども生拘毎を拷問して
他們が密策を听ぬるニ。尚一隊の兇徒あり。庵主を搦捕んとて中途ニ埋伏ありといへバ。胃安
からざる所あり。和殿們その義を守ずやと。急迫しく問へバ。荘介答て。然バとよ。その事なれ。我們も亦
堅削が首伏して既ニ知れり。然ども他們を誅戮せで。その処まで牽もて来ぬるハ。大庵主の教を
守りて。衆議ニ任せんと思へバなり。とぞいふニ小文吾現八も亦云云と解示すを。毛野ハ倩ち听て。那隊の
頭人長城枕之介ハ。經稜素頼と同ナからで。一百名の隠兵あり。是ニ加るニ逸足寺の住
持徳用ハ。出家ニ似げなき武藝ニ長て。旅膂力飽まで剛かりと聞ぬ。侮り難るニ惴利ハ隊の
兵ニ持しゝ准備の神器將軍ヨヌあるのと生口毎が招ニよりて。これを思ふニ。実ニ是勁敵之犬塚
素より智勇ニ秀て。よく敵とするニ足るとも。失ずと言べからず。文那星額長老師弟ハ鄕ニ

素頼に撞見して搦捕られぬと聞えしかば剛才躬方の夥兵なりそ其頭を曲なく索させけり。
那里へ牽れけんかしらずといふ事の理る折もあらば這宗徒の生口と那十個の法師達と交易に
便り宜しかるべし。然らでも武威を示さん為に素頼經稜堅削們悪僧は殊更に頭立たるを
許されとるべく那里までも牽もて来れて犬塚蚕崎姥雪に力を勠して庵主を守護せん皆
立あへといひそぞせば大角一霎時と推禁めて郷富に咱們が馬共侶に雜滾しく生拘る那根生
野素頼は馬に布れし折より腰立ざれば其馬も亦後脚痺るを牽もて出くに不便なる經稜堅
削と共侶に孤馬ふらち駝せんといふに大家異議もなく夥兵に手多く吩咐て素頼を亦合鞍に
縢け駝して牽出さぞ。その為体をうち見れば俗にいふ三貌荒神の軽尻なれや。草枕旅路
はそれと六犬士は去向甚麼と安らぬあたる武井の驛路投て人めあらぬ杖原其里わたと
なりし捷徑を求めて倶にいそぎけり。誠や時運に厚薄あり事に幸あり不幸あり。ゝ大に
倶しる信乃們の安危は下の回に具なるべし。

第百三十七回　ゝ大庵の厄に親兵衛伴を喪ふ　石菩薩の前に信乃應報を悟る

單表犬塚信乃戍孝は道節毛野莊介小文吾現八大角們の六犬士に先だちて蚕崎主僕姥雪代
四郎們と共侶に、ゝ大法師に相從ひて上總路を投ていそぎつ既に結城の町を離れて出ること一里平あまり武
井の驛をうち過て杖を諸川の方に曳く程に當時は這頭に岐川ありその一川は許我川俣へ相流ぎ又
一川は仁連木家部堺に迫りて倶に利根河に合流せり。ちなみて土俗是を左右川と喚做せり今は
這川ありとしられば看官許り思ふもあらん遽莫水路の同じからざる今とそてその昔の様とも做なるぞ。
船に契して送あし剣を求るに異ならぬ陵墓鋤れて田となるあり。蒼田没して海に做る世代の轉変なるに
べし然ば這左右川の分る処に長五六間許なる圯橋ありけり関宿より流れ瀬て結城の城下へ来る者は必
この橋を渡るなるべし。間話休題却説信乃照文代四郎は九個の伴當と共侶に、ゝ大法師の前後に立
ちて武井の驛をうち過て左右川の上に来にける程に小塘隄に植る並樹の間より居ゞの隊勢を従へて走

ゝ出来る騎馬の武士。是則別人ならず長城枕之助惴利。向ひて殺塞ぐ。その隊の賊兵六七十
名御詮々と喚りて各々々に振晃めかす十手の電光目を射る如く。前後を争ふて緝捕の勢ひ猛う
攻かゝりぬれば。大法師の先に立てる照文も代四郎も今倒れ一言半句の問答の暇もなく何事ぞと
なかに組しせまじと相挑む修煉の拝劣らず優らず投退をし防げども捕隊は然しも少より寛る多人
數なれば物ともせず。然ば照文が若黨紀二六並に八個の伴當は怯れさるにあらねども武勇捷れし者あらねば。
防ぎ難く捷伏せられて迭く搦捕られけり。その中に大法師は駝なり。李基主の逆骨と矢へども
のミ心に栽て聲も乱れぬ降魔の經文誦拭々錫杖もて防ぐ甲斐ある武藝の妙要昔の餘波著
れて毫も透間あらざれば。敵の賊兵を闘るのミ。輒く捕もえざりしを。惴利は馬上に焦燥て罵りつゝ叉励して連
[illegible]に隊勢を挫めけり。有恁て程に犬塚信乃は趕來る敵のありもやせんと豫思へば由断せず。大法師と
相距る事約一町許にて殿しつゝ來りける。恵は後にありしを。緝捕の勁敵前にあり。一騎の頭人居るもの
賊兵們。大代四郎照文主僕を推捕稠て鬩くとみるといへども慌ず誤まじ心よ思ふやう。那奴們は隊

ゆく結城の二士の一人なる逸走寺の住持を番助る乱妨ら及べからん。先那騎馬の頭人を轂て仆さんと。
殘兵らが戦ぎして退け易しと勝肩を揣る武男の即智にて今へる路の傍なる蒼稲塚の小杉木を是究
竟と捩合て腋挾みつ蒼然と走り向んとせし程もあらせず。這里なる樹蔭に丈敵あるて顕れ出る法師
武者その勢約莫一百許の内中に一個の隊長あり。問でもあらぬ這は是逸走寺の住持徳用なり。括袖法
衣は架裟頭巾尚已時可なる白袷衣の下に身甲をして鐵の鹿杖の重六十五斤なるを突立々々先に栽て。
隊勢と倶に失々と去向の路を断塞ぎ。信乃と佐と疾視て四下に響く聲も尖鋭く若们大胆鳥滸の
濫惡見事を法會に假托て當城の虚実を闚ひ悪を窮民に施して這地に住り我寺を傾けんと欲し
ある伎倆を誰か知ざるべき。國守の與には奸賊。當寺の爲には法敵なる故に我忍辱の鎧を脱て弥陀の利
劍に異ならぬ這鹿杖を携へ只一打に往生させん。噫法師们は温しもねる大刀佩しとて憚るべき狄
宙に吊して來もぞやと喚り哮れば。その隊の悪僧道人士共侶に或は眉尖刀捍棒を打振々々競ひ
蒐るを。信乃は准備の小杉木もて打拂々々先に栽ゝし一両僧を左右へ撞と轂仆せば怯むとき又聲

高手に若們破戒無慙の兇僧一個の敵と侮りて安房の里見の犬士の一人犬塚信乃とまだ知ざれバ本事せんとするもの果も皆三の隊の悪僧們ハ入む肩尖刀に身を淪して両勝撲地薙倒せ武藝精妙思ふに優て宛神出鬼没の挣れに悪僧們も皆舌を掉して又立替る新隊ハあらで遂巡を表ぬものなれバ徳用怺へも鐵の鹿杖両手に拿て揚て輪々々と西三番振試さみ粱粉に做さんと走り蒐れバ信乃ハ透さず身を反して小杉木もて丁々磯と受流して相挑めども器械相応しからねバ看官越する胸安らで勝負誰何と思ふもあへ知ざる信乃が懐も那孝子の宝玉あり然でも自得の武藝精妙毫も透間あらざれバ徳用憶ぞ腕乱れて心情地に驚けども猶も撓ず踏入々々嘖え叫びて戦ふさる事の光景目覚しく雙龍深淵に珠を争ひ両虎高岳に宍を欲するも信やと思ふ可るれバ全隊と悪僧道人們も呆れて倶に長視て在り然バ又左右川の邊にハ照文代四郎居ながら敵を防ぎ難て共侶に只得刀を引抜て殺拂々々一霎時ハ挑戦へども惴利連りに隊勢を残めて息をも艱ず攻よりければ照文も代四郎も竟に勢ひ窮りて代四郎ハ跌顛び照文も亦敵の十手に刀を丁と打落されてひとしく擒捕らるゝとなるに不娯しつゝ大法師ハ左右の帮助を喪ひて防ぐに術のあらざれバ亦倒に敵を拒まで覩念の外他事なかりし暇兵們ぬ左右より抓て瀰りて組禁れバ惴利馬上に雀躍して其奴縛めよと足も結極れくと下知しけり嗚呼憐むべし二十餘年抖擻行脚の勇僧も時運好らで暴戻奸許の這禍鬼を禳ひもあへぬ嗟嘆まる方なかりけり浩然に大江親兵衛ハ政木孝嗣と石亀屋次團太鯛三を伴ひて五十三太素も吉に送られる水行を今日ハ関宿より陸に登り路次を急ぎて孝嗣們に先だちて約莫一町許にして目今這里に来にけるが遠れバ左右川の那方にて旅客ならん三個の僧俗緝捕の暇兵と戦ひ眉て既に搦捕らるゝあり、その旅客主僕の内中両個ハ是武士にて紛ふべくもあらざりける照文と代四郎なりければ原来法師ハ向でもあるべし、大大徳にてそあるめと驚れ思ふ意外の遭際に等すとられば左右川橋を飛が像くに渡りもてゆく怒に堪ぬ聲高やかに狼藉れ人々虚そと止めよ事具には知らねども同藩の情朋友の義あれて我ハ已ん兵無心けば犬士の一人里見の家臣犬江親兵衛仁なるぞと名告も果ず鐵扇もて惴利が馬の尻を力に乗して托地と撻ち撻れて驚く馬ハ只狂走れる勢ひ駐らず主共侶に左右川の淵へ

天助人力（てんじよじんりき）
窮（きう）と厄（やく）を解（と）く

水火と陥りけり。親兵衛これを見るもえらず驚れ、譟ぐ敵の夥兵を又鐵扇もて、或は蹴倒し擲抛て、飛礫に合して擲る折から、後れて來ぬる孝嗣次團太鮒二郎共侶に事あるけりとて見れば、うち驚きつゝ甲乙齊一走りて渡る左右川の橋の中央に追る程、前面の岸なる藪蔭より連放る鐵砲の筒響と共に、孝嗣们は二名倶に撞と斃れて、陥て往方は急湍の水に推流されし、狹論ミし挾在るとよそ見るものはなかりけり。原るに這數十梃の鐵砲は是別人の所為ならず。惴利豫め夥兵を分ちて、三十人の鐵砲を持して藪蔭に伏置きつ。艦䂓見们尚悍くて、なほ餘るものあらば斃し什ねと下知あれば、然ばその三十個の夥兵们は思ひかけねに、一個の少年が諸川の方より走り來て、矢庭に頭人惴利を人馬共侶撻走らして、川へ陥しのミならず、躬方の夥兵を投石に合して、人ならぬ境に入る如く、武勇に當るべくもあらざるに、他が一路見出しあらん主僕とおもへる武士二名、那少年に些し後れて走りて川の前面より突然として來にければ、這藪蔭なる伏兵ら趣くと易窺と、うちて一隊は把橋を渡り來ぬる三個の敵を斃さ陥し、一隊は少年を斃さんとて、十四五梃の銃頭を揃へて其方へ推向て、一度に鑽て放ちしに、伏姫神の擁護ありけん、親兵衛、大の身ゆらゆく擒捕られて這里にあり。照文主僕代四郎们は、その鉄丸毫も中らずして、斃るゝ者は皆他们が火家の親兵衛と戦ふ者のみなれば、死を免れし者は驚き呆れて、群る鼠の逃るが像く、一個も在らず散り〳〵に、伏兵も慌且恥て、又遽しく丸を篭て、復親兵衛们を斃さんとも揉る折から、忽然と勍風猛可に吹起りて最凄じかりければ、那伏兵们は鐵砲の火索を都て風に合されて、又斃すべくもあらず。天さへ曇る塵霾に黒白も別ずなりしかば、伏兵们は驚き譟ぎて、吹倒されじと四下なる竹に推りてありけるに、藪蔭に年歴たる槐櫝の倒るゝに挨れて、矢庭に死たる者五七名ありければ、大家は堪ず慌迷ひて立去んとせし程に、最闇なれば、よく迷ひて川の邊へ出て來り、憶ず風に吹滚され、齊一急湍に陥りて、浮ぬ沈ぬ流れけん。這頭に敵あるをも知ざりける、程に親兵衛は、後れて來ぬる三個の同伴孝嗣次團太鮒二が、方僅左右川橋の中央にて、憐むべし、敵の鐵砲に斃されし水に陥りける。其光景を見るとえども、事急なれば救ふに由なく、剰我身も敵の銃頭を免るべくもあらざりけり。折に及て他们は同士斃しして、躬方の洪福なりしのみならず、勍風猛可に吹息荒れて、塵霾天を翳め、一霎時野干圭の鳥夜になりしかば、敵の伏兵慌迷ひて走りて河水に陥りけん、其頭に水音高く聞えて居旦の

文溪堂蔵

人の呼とゞろりに叫ぶ聲ありけるが。後ハ音もせざりき。寔に奇しき天助あるに猶幸ひあらざりけるハ。疾風烈しかりけれども親兵衛その餘も、味方の身邊を避て吹けん中らねバ吹倒されて患ひもあらざりし。孝嗣们を悼ぞと思ふに。哀歎交〻分くよしもなく惆然として在りける程に勁風悟ぞ塵霾霪霧雨弁て青天白日明亮なる。登時親兵衛聲をかけて。彼蟇崎主姥雪叟幸ひにして恙なきやと問ひつゝ、躯て匕首をとりて蟇崎主僕代四郎が縛られさる索を截棄れバ大家欲ぶ中に照文と代四郎ハ敵の彩兵に打隊されし両刀を拾ひて抗腰に跨て感涙の我むとも思ほえず。吁犬江生救れたるハ神の所為歟再生の恩奇なりて妙なる縁を那里に在ものハ大庵主にてそといふ親兵衛と、これを見るへきも遑しく、大の身邊に杖を朝ひて跪きて吾ハ師父とすへきたる晩生則犬江親兵衛仁也。年纔に四歳の時舊里近き行徳にて目にかくてゆとし人の傍に少くのミにて面を忘れたりけれバ亟もそれと見ざりしハ難し。遅鈍失敬許させ給へとて丁寧に陪話けり。這時、大も料らざりけり。親兵衛が扶助によりて身ハ勍敵の索に被らず且風雲の天変して最大暗くなりし時、敵も雑兵に打墮されたる錫杖を撥拾ひ合せて笈を擔駝る隨にて端然として立在るに、今親兵衛が名告るを聽て。

左見右顧て感涙の我むを覚ざりき。頷きて詞徐に答るやう。且く絶て久しき再會の幸喜なりそ。今の僻鬼と對治せられし武勇人柄正是和殿なりしを知るものから、然も危窮の折にして風雲闇夜に異ならねバ、支向ふべくもあらざりしに勍敵去で風雲殿る侭ハ迭に恙なき對面何事歟これに優べき。却いと大きら倣りける神の冥助と霊山仙果の藥餌に憑るもの大人備ると勞しに優て目覚しき和殿ハ自餘の義兄弟七犬士に先たちて君侯御父子に拜見の始より大功ありける事の顛末ハ、且両國河の邊そ憶ふなく蟇崎生に君命を傳られて反賊蟇田素藤を再征の爲にとて田税逸時古屋景能並に五十子太素らを吉とせんと伴ひて舟路と上總へ赴きしと云その折までの崖略ハ、蟇崎生に聞されたり。意外に再征の功を既く成て目今来會せられしなるらん。と問れて親兵衛然ハ既に精なりしに錯ひて素藤對治の手功ハ逸時景能孝嗣次團太卿三们の帮助もあり、又討隊の大將荒川光の陣営にも謀し合せし御方の勇戦一致の故なり。然バ素藤妙椿ハさら也、宗徒の兇賊等もなく或ハ生拘り或ハ誅して館山平治まれど。猶一椿事の先命あれバ自餘七個の義兄弟を索て途に迎ずぐ蟇崎生に面會して這地の法筵にあ

までの餘時あれかしと思ひ給ふ心頻なれバ。そが儘に館山を辭し去りつゝ孝嗣次団太鄭三と倶に。今日巳
牌過る時候。船に関宿に果らバ。送られる五十三大们ハ相別れて陸に登り路次をいそぎて剛才這里に来ぬ
けるに橋より見れバ。我身並に蟇崎主僕姥雪们に急難あり敵ハ誰ゆゑもあらバあれ皖に奴るべからず聊
孤力を盡さんに猶風雲の天助ありて思ひの随に各位を救ひ得つ。然ぞ就て又最遺憾しけれハ孝嗣次団
太鄭三が横死也。我步殊に早かりけれバ他们ハ後れて来にける程に敷蔭なる敵の鐵砲に斃されて川に陷ぬべく。
骸も留めずなりにけれ今の歎きハ是事のミなりと云ふに驚く。大と倶に側聞たる照文代四郎さてハとむろ胸を
渋して齊一嘆息をつける姑且して代四郎ハ親兵衛にうち向ひて喃和子老僕も今日に蟇崎主と共
にそ折ある使を奉りて船を我身の舊里なる市河へとぞ乘走らせしに其事其趣ハ帰まで及せあらねバ。風
波の障りありて我身が那里を立去りて。後に犬江屋が本意を遂ず這地に来て蟇崎
主に對面の折我身の往方も那人々の忠孝義侠を多知てぞ。憑しく思ひて政木生石亀屋们も這
里まで来つ。敵の為に可惜命を隕されしハ現痛しけなりそと云ふに親兵衛嗟嘆して。その勿論のみならず僑に

我们路次をいそぎて。諸川を過る折前面より来ぬる一個の法師が咱们をやゝと喚住めて和君達ハ今日、大
庵の念佛供養に會んとて結城へ赴くならなんとすべし。いまだ知らずや件の庵主ハ今恁々の地方まで一路見と
共侶に免れがたき急難あらん。その故ハ箇様々々恁々の情由ありて庵主の宿願成就の日星額長
老師弟のみ及先君季基朝臣の遺骨のみ又施行の折に来まけるもの法師が忠告の首尾の趣逆足
寺の住持徳用その徒弟堅削们が悪心邪議て帮助なる結城の驕臣經稜素頼儒利们が詭
詐の緝捕のみ又犬山犬阪犬飼犬川犬田犬村の義兄弟ハ塔所の茂林邊に猶在りて二隊に別れて敵と
戦ふるのみ又犬塚ハ蟇崎姥雪们の帮助として庵主に倶して塔所の茂林を立去りしなれ。その餘念佛
供養の光景姥雪ハ更ハ故主の随意與四郎の與を改めて代四郎與保と喚るゝまで漏さで具に告
らる言約して詳らかに時を移さず听果ける。虚実ハ知らず怪しくも胸安からねバ件の法師が出処を问質さんに
遑あらばこそ侭に立別れ飛が像くに走り去てあれバ果して那言錯らで更達主僕ハ搦捕られて庵主
も危窮の折なれバ毫も躊議せず踏入て聊孤力を盡しに敵ハ火銃の准備あれバ防ぐべくもあらざりけり

なに奇しき風雲の幇助によりて同士撃させて、射方に利あり。遂に怨敵退散して皆恙なきを幸ひ、是晩生が功にあらず。庵主の道徳高ければ佛菩薩の利益ある歟、亦守護神の冥助ある歟。然らずは遺骨を馳れぬ先君感靈の擁護あるべし。恁る奇特ある事、孝嗣次団太卿三の果敢なく敵に撃れ陷されしは命數爰に竭る故歟。他們は忠孝義侠にして身を禍鬼に喪れし因果を佛説に據て思惟れば前世の業報とやいふべからん。左にも右にも惜しけれど、唧言がましく觧示を聽て呆るゝ照文を諭思ひし、又奇しく親兵衞も知られて、他よりの事ならなく當意即妙さもあらんとだもの安否を知るもありける、姑且して照文が示す。是も亦大江生も知られ、欲知られねども卑職もの地に來ぬる折、大庵とたゞ其難て殆困じたりける奇しき法師に案内とせられて百會目の本意を遂たる刹、亦星額師弟の石塔婆の奇工ある乞丐法師の思告あり。是に由て彼と思ひし和殿を先機を告し法師は權者の化現なるべし。然りと憑しく思へば代四郎もうち點頭て倶に感嘆をしたりける。這時、大は復も御さも朽樹の伐株に尻を掛て件の奇談を果て、親兵衞に向ひて然なりしが如く妙なる這那一致の善報は、凡智をもて悟りかたけれども、那政木生とやらん義人

三個の落命は実に和殿のいへる如く過世の業因なるべしと思へば絶て絶もせん。苦心許なきは犬塚が安危也。那人は始より趕來る敵のあらせんと思慮りて一町許胡意後れて來にける程、這里に勍敵の起りし折、犬塚も亦一百あまりの悪僧們に路を斷れし力戰の光景は間遠くもあらざれば、拙僧們も見てこれを知れり。素より法に風雲の奇異ありて猛可に暗くなりし折、犬塚は何となりけん、今又その那里より敵も那人もあらざる且塔所の茂林に敵を追ふ犬山犬川六犬士の勝敗はいまだ知るべからず。たゞその義を思ひのみぞと問へば、照文代四郎も然也となど點頭て、現犬塚の上へしも我們も亦心に掛れば、犬江和君に商量して指揮に據んとおもひしかども要談ありてゆく。言後れたりといふを親兵衞聞きて、その義は庵主も曳達も然ながら配慮なきにも、犬塚は那孝嗣次団太卿三們と同じからず、身を全くするに於て天王あれば擒捕らるべくもあらずと思へども、姑儘に見捨て那里へいかんや。晩生は悪衆徒に認られざる事ぞ幸ひなれ、那里までも赴きて犬塚并に餘の六犬士の安危を尋ねて力を勠して共侶に退て來て、曳達は庵主に倶して諸川まで退きぬ。這里は人煙遠ければども結城へ入る者出る者の必據なる要路なるに、今まで徂徠の人なきは風雲の闇に怕れし歟。然らずもあらずは亦神明佛陀の禁めあるにあらんぞ。

然ればとて虚々と這里にて長談すべくもあらず。○照文代四郎頭を掉て、そハさる事なれども大田犬飼犬塚を除くの外、和君に對面せざる犬士ハ迭に面善ずもあらず。然バ犬田ハ和君の小父でも犬塚犬飼ハ相識でもなき面忘れもやすらんか。何を所拠に名告あへべき。只我們も倶に立べくなれどゝいはれて親兵衛沈吟して、然とてもこの両個ハ要なし。姥雪吏を伴ふべし。枉てこの議に任しね。今先見べきものぞあれとて、躱て身を起して走りて圯橋の中央に在て水中せる左右の水際を両三番見亘して故の処にかへり来つ。然而大照文代四郎們に報るやう、晩生那里に赴きて檢るに限もなかりしに、孝嗣次團太卿三們ハ急流の為に流されけん屍骸ハ孰もみえざりき。又衞尚ハ晩生に馬の尻を纔撃されて走りて人馬共侶に川に陥りし敵の頭人ハ則結城の家臣にて長城枕之介鞴利と喚做す奴なるらん。那奇しき法師に听れぬ者ならん、那奴も馬さへ見えず。只那鞴利のみならず慌て怒風に吹滚されて一度に川へ陥さるんと猜し思ふ。那伏兵們も川下より逃る敵を推流されし欲在ざるか後安からで、蟹崎主ハ伴當を將て庵主と倶に這川邊をよく見よかしといそがしき折から、是然と結城の方より人居ヨ這方を投て来るものあり。敵欤と見れバ正に是七犬の毎にて、信乃ハ既に徳用を生拘りて躬方の隷兵に索を執らして真先に是を牽して又

道節毛野大角荘介現八小文吾ハ素頼經稜堅削を一馬に縢乗せて、その宅生拘の僧俗ハ亦七個の隷兵子を牽て聚ひ来にける光景ハ天部の善神戰克て阿修羅を降し勢ひも倍えと思ふ。照文ハ見て身を抗けうち招きて、喃大塚主犬士達、我們ハ衞尚に這地方にて大敵防ぐに勢ひ窮りて主僕共侶に捕られ、庵主も免れぬかりしに、料ずも来にける犬江生に拯れて勍敵退散せしと歎びあまりて憚りも忘。喚聲の高きにぞ自然の勢ひならんと思ふ親兵衛ハ夭く身を起して、代四郎と紀二六が後に跟きて走りて五十歩許出迎て、小父公ハ孰にいぞ。犬塚犬飼自餘の賢兄、晩生則大江親兵衛仁にて候と名告るを、小文吾信乃現八を第一番にて荘介道節毛野大角も來で親兵衛に近つきて、大八歟、ゝしより思ひしよりも大人備て適男になりけりよ。酒家ハ小父也小文吾ぞ。咱們ハ信乃也現八也と七個名告る。不勝の喜び背を拊ち顔ら目成る親兵衛疎々隔なく、皆骨肉の思ひあり。具に名状しかたげなり。代四郎ハ合笑ながら照文の若黨紀二六們と倶に跪きて傍に在り。鳴呼時なる哉至れる哉。八犬ます具足して八行の玉聯串の功、大の宿望虚しからぬと看官もうち微笑なるべく、作者ハ二十餘年の腹稟この機を發く小團圓のみでもあるに一朝の筆なさるを思ふべし。○問話休題

時、大照文吾七犬士と相迎へて親兵衛が稜尼の戰功と風雲天助の崖略を箇様々々と告知して躬方主所の勝利を問ふに道節荘介先登てその寄隊相謀りし如く我們は那茂林毛野大角現八小文吾と三隊に別れて緝捕の士卒を驅て走らし小文吾現八を悪僧堅削と畋老經稜を生拘り又大角は根生野素頼を虜にあげしが其奴們は足を損ねてあるくべくもあらざれば分捕なる經稜が馬あるをもて件の三虜を一鞍に縢附て牽きてあるに餘の生口も法師武者は殺伐破戒の罪許すべからぬ又經稜素頼が家僕などは鏡さぶして牽きて來るぞの宅従々の奴們は両所の茂林の樹の幹に結扭着たる倭にて皆ら棄けた豫庵主の教訓あれば一個も敵を殺さで只に却憐むべきものは星額長老師弟之事の始に寄隊の士卒と和解て無事に扱んとて漫に走かうて素頼が理不盡に一個も漏さず擒捕らして後陣に退けるとぞ聞て関戰果て躬方の彩兵に其頭を限なく索させてし那里へ牽て亟に徃方は知れざるなり故に這生口們を那長老師弟と交易の為にもがなと思ふのみ却這里まで前後に敵あれて戰ひ難義なりし祈天の資助か風雲天と聞くなりけるよりは大塚にて胸安からざりしにも恙もなきて芽出しと祝ぶ現八小文吾毛野大角も亦云と喜

びを舒るにも當下、大照文は星額師弟とあれきて且八犬平らの功を盛め這里なる敵は同士毀をしける事恁々と告知されば信乃は亦、大照文に告るやう彼們は悪僧無路之節れて合期甚ざれば庵主の先途を救ふに遑あらず戰ひ果なりし時候怪しき風に兵別れて後に徳用を生拘り又折から這六兄弟們が勝軍をも退きて遂ひしかども事の首尾を且その地方の路備小堂も今昔未曾有の奇異あるをも思ひ合するよりあれど尋く告まくすれども。恁立聚ひて時を移さば城より討隊の大勢を萬らでとあるん折防に便り宜しからず先諸川の方に退きて便宜の地方に敵を待んといへば道節技を寄てその義最をなし城より討隊の追来るあらば悪僧俗們が非法邪計を詳に鮮示まく我們素より罪なきよしを告るとも聴れぞは先嚮未祀に生口毎の首毀を落して寄隊を破らん今更別議ありなんやと惴るを毛野は推禁めて幷も亦時宜に由るべきの卒もべしといへども親兵衛も亦のすら咱們も亦賢兄達に告まくすれど一路兒の薄命の歎あるをといへども今の急務にあらざれば再議の折に餘談を盡さん這里に要なし卒とのふに大家異議なく八犬照文代四郎は彩兵伴當共侶に、大法師の先に立ち後に跟ぬて生口毎を追立々々左右川橋を渡りてその路を莊介と照文は年来疎遠の親族をもて小文吾と親兵衛は外

戚の小父猶子なれバ那と這とハ肩を比べて梢〻に舊りたるを談るも楽しからずや。然バ左右川橋の那方なる田
圃を畊る荘客們ハ這光景を遥に観て驚怕れざるハなく途に行かふ土民旅客も亦逃躱れて遮莫ぞ
者なけれバ八犬士ハ十二分に隊伍を整へ威風を耀かして徐歩もて半里許になれバ路の傍に一町あまり引入れる並
樹ありて前面に故かくる三門なえあり登時毛野ハ遽しく先に立る道節荘介小文吾現八を喚住め各這頭ハ鴿
んとすが那舊院をえなるべけれとぞに道節們ハ一議に及バで信乃大角親兵衛、大照文代四郎の従者と毛野が
意見を宜なり大家ある豪べしと応しかバ照文随即伴当黨なる直塚紀二六に吩咐て那里の光景を見て来よとて。
いそぎ立て遣さしに姑且してかへり来て照文并に犬士們に告るやう小可那里へ赴きて隈なく検しみ昔ハあるべき
大刹なりけん今観る所ハ荒果て草茸々たる処々に柱礎の遺れるのミ。遮莫庫裏ハ猶ありて幷も荒れ堕砕て。
雨ハもる天月も漏らざる白壁壊れて骨の顕れる処蟠る形なる窓に似たり然バ柱斜にして片假名のノの字に如く。
堂貝子又朽て燕子花なる八橋かと疑る倭れバ守る者ひとり倶庫裏の背の方に聊小なる白屋あり其首に年
六十許なる一個の法師が柱に背を凭せて打眠して在りしが山猫寺猫を向んと思ひてあくび喚覚しけれど熟睡

なるに聾児ならぬ狭応せざれバ術もなく走りかへりて然と報るを照文ら听て且犬士們の意見を問ふに異議あるべくも
あらざれバ卒とおのおの連立て大家三門の邊に迫るに柱酷く傾されバ雖推々ゝ門扉開かで得角門の頽れる処
より潜り入るに現紀二六がいひしに寂寞たる廢毀院昔の餘波ハ礎のミ菇々たる夏草の裡より驚き立吉天丈
なるハ雲に入る青葱たる新樹の陰にハ郭公鳥の聲高くはえけり然バ苔生る石の水盤ハ虚しく施主の連名を残し。
笠を喪ひし露佛像ハ膝に茨の花開て鐵の蛛に趺坐あのりて且是を見て鼯鼠の栖に做まる埋井に隣る狐の
穴あり鳧鳥の番其白き石上に兎の足跡ヲヌかり正に足る仁乱離の災に遇ぬハ嘉吉の兵燹に亡びる七堂伽藍
なるべしとぞ思ふ八犬士ハ、大照文代四郎と共に倶に立取ふてこれを観る程に毛野ハ紀二六を案内にして庫裏并井に
ありとふ白屋に赴て検するに在りと見ゆる一個の法師ハ那里曳ならん影もなく其頭に立る石地蔵の水盤の左右に
隅に塩を主器に杉形に装てあり這石菩薩ハ墨に詣る人あり狭然らバ那法師の供へたるならんと猜ある
のミ人在らざれバ問に由なし。又這白屋の前面にハ大きなる竹叢あり折ふし壊も串ぬきる筍子あ或ハ二三寸或ハ
四五寸なるもヨヌくありけり毛野ハ那法師のかへり来ぬるやと一霎時白屋の檐下に立在ちけれども既に日は傾けバ

文紀二人を先に立て、庫裏の邊にまゐりける折、七犬士は、大照文代四郎と倶に裡面に入て、憩ひて在る經稜素
頼德用堅削們、都て生口毎ぞ外面なる葛籠石或は老たる松に繫れて、照文の騎兵伴當們ら戍て
たり。現庫裏の簀子は朽られども猶膝を容る処なければ、あるは遽莫蓙を求めく得れば猛可に草を苅て鋪せ。
そを打布しく、大法師は笈を上座に卸し居て、徐に數珠を爪繰て坐り、丹が身邊に七犬士と照文代四郎も
團坐をなる、毛野が今旦なるぞ照文らも今旦の閙戰は不慮の事ぞ戰飯の准備なければ、孰も東
西欲しき時候なるべしと思へども市遠くして徵めうくかり、犬阪天智ぞ庫裏の昝あり。好主意と思ふぞと向ふと信乃を
推禁めて、只咱們豫より准備をなすにあらねども細小の癈貲ある。連立來つる六兄弟見もやせまするならぞ。その
餘に又告ざりければ先に來歷を解んとする事の顛末を原ぬに信乃は衢宮に中途にて舊稻塚の小杉木を立て居
たる多の敵を戰なるを走らして那德用と戰ひに、德用は武藝あり且膂力人に勝れて六七十合もあらんと思ふ鐵の鹿杖を
兩手に採て二運時は挑とらけれども分に過たる器械なれば漸々に如意ならで腕亂れて堪ざりけむ怯れし衆徒を
罵勵して犇助を討るもと急なりければ初逃たる惡衆徒們一度に咄と返し合せて推捕稠て輟せんと為時に勍

風猛可に起りて天を翳る塵霾に敵も信乃さへ仰さまに吹滾されて忙擇ありて兵別れぞなりける。然ば德用も
惡衆徒們も怪しき風に怕れて迯しけん。然れども猛に闇に迷ひて、心ともなく退きて去りし。恁這頭に敵は在るぞと
猜まる信乃は剛才川の邊まで敵の銃响ぞえしと思へば、庵主蚤崎生姥雪們いかにかなりけん。疾那里へ赴ばやと
安危を倶にせんずれと心頻りに逸れて、櫓揺とも橋ある方に走りもてゆかまく欲せしに黑白も別ぬ暗ければ、鈍や投ぬ方
へ屆らずして小屋の邊に迷ひ來ぬる許りなり。那這と搆り探りて推量るにある、褊小なる路傍の矮堂の衡に
ある処を過りし折、心ともなく見しは正可に是なるべしと猜しくて、姑且風を避んとて、躱て裏面に入て撈撿るに四面も
僅に六尺に過ぎして、立像の石佛あり。門扉は風に吹採られし。狹出入に障りなければ、臺座の石に尻を掛く。風の恬ぬ
るを竢程にいまだ半時ならずして、風歇て塵埃鎭りて天の明けるに異ならず。登時信乃は這路傍小堂なる本尊を
肇てよく見るに、則是石造の地藏菩薩、身材五尺許なるが、臺座の上に立せ給ふ。素より石の良ならねども面部に鉄
たる処あり。且茜染の布囊裏の麻の紐を附るに東西を納て錢四五百文縢附る。頂に掛てありける。其為体許
あれば、合掌卸して撿まるに囊裏は地藏の頭巾なるべし。米弐舛許藏てあり。熟思ひ合すれば、囊裏に大庵主施行の

折最後に來まけりとぞ。那忠告の衰老法師か。紀二六が計ひて殘れる米二舛あまりと錢五百文を取よせと寄えに。這那符節を合する如し。然れバ那衰老法師ハ。這地藏菩薩の化現にて。米と錢ハ紀二六が取よせし。東西に疑ひなし。あら奇異に過ぎれども。熟々唐山の故事を思惟るに。豐山の鐘ハ不敲して。おのづから鳴り。魏楡の石ハ非情なれども。よく言ひしとあり。又僧生公ハ經を虎丘寺に講ぜしに。その經を信ずる者なかりしが。石を聚て聽衆と做せしに。談義妙理に至る毎に。その石皆點頭きしといへり。去ば今這神靈奇瑰も。亦那等の類とやいはまし。畢竟、大老庵主の多年勤行不怠の積德。天地幽冥に感通して。那菰留害と這佛の。尙も告させ給ひし。狹然にてハ常言に緣なき衆生ハ度しがたしといへり。抑這地藏菩薩ハ始里見殿に緣ある者の建立せし像とぞ思ふに。思ひ難く。御佛の背のくまをよく覘ねバ。彫做る歲月あり。嘉吉元年七月二十四日。建立願主淨西とあり。二十六言の鮮明に讀れしかバ。越に聊考據をもて。這淨西を人に問バ。素生を知るもなし。是有信の奇特を庵主にも義兄弟にも。蟇崎们にも告るに。事の照驗あるハ。虛談とも思はれん。要こそあれと肚裏に主意さだめて決りしかバ。地藏菩薩を默禱して。然而勤肚の財囊より。方金一箇を合せて紙に拈りて。五百の錢に結附て

地藏の項へそが係楚とうち載けるに。既に佛菩薩へまゐらせする米なれバ。則一分の金をもて那と這と換るなり。恁而信乃ハ囊裏頭巾の口を結びつゝ引提て。徐に外面へ出る程に。這路傍小堂の左右に躱れて。信乃を窺ふ兩個の敵あり。是則淵へ介る。一個ハ逸疋寺の德用にて。鐵の鹿杖を青岸に揉て在り。又一個ハ同院の道人某乙と喚るゝ破落戸にて。明晃々たる中刀の長やかなるを。直額に拔翳して。出バ毅らんと構へたり。這時信乃が危きと旭に向ふ草の露。路風の前なる燈火に等しからむと。思ひも掛ず出るを遲しと。走着けたる左右一度に。邪と聲掛て。毅らんを閃りと引外せる神速微妙の標姚に。惴りし德用空毅して。倶に𨁈ろし。道人は肩尖礮と毅る。擢けバ。呀阿とむろに叫びもあへず。血潰起て仆れけり。德用これに驚き惶て。一たび毅らんと振抗るを。信乃ハ毅させず。右手なる臂と拳揚りに。合せ禁て丁と中る白打の妙術。德用も亦竹斗りそ仆れて。一霎時氣絕をせけん。又起べうもあらざりしを。信乃ハ大刀の緒拔出して。最も緊しく結括りけり。浩処に。道節。毛野。大角。莊介。小文吾。現八們二隊の六犬士ハ。生拘の僧俗を。或ハ馬から駝し。或ハ八個の𨤲兵に牽せてうち連立て來にければ信乃ハ適これを覘て。近つく隨に六兄弟に二度鬭戰の支の趣。怪風猛に塵埃を起して。一霎時

文溪堂藏

晦冥に做りし甲。迷ふて這里なる路傍矮堂に風を避る料ぞも。徳用を擒虜にせるも地藏菩薩の靈應利益の首尾を解示して。嚢頭巾の米と又佛像の項に乗しる銭と方金さへ指し示まで思ひしよしと告知されば。六犬士は咸胆を浹して。我們は今見るごとく虜にせる敵の悪僧俗と両所に戰ひし折も又牽して。ここへ來ぬる路ぞそも。今る風塵の起るに遇ねば闇く做りぬるあはひぞ。意ふにそも伏姫神の靈驗冥助なるべし歟。但思ひ得ざりしは。這石地藏の利益大なるを建立の願主淨西は現和殿のいへるごとく今も尚世に在る人歟ふとうらひしも心地はされども。其は左まれ右もあれ這石佛の利益に依て。寡勢の敵を防ぐ准備を立地に做ましかば。思ひの随に克ことを得たり。敵の頭人悪和尚們をかくの如く虜にせたり有徳なる那隊に鐵砲あれども。庵主は得る蜚崎生も姥雪も恙なきは。是奇なる妙なるかなと稱えて倶に跪きて。地藏菩薩を伏拝ぬ。側聞せし八個の夥兵も皆駭然と驚き感じて深信胆に銘するまでに最漏しく思ひけり。這時徳用は息出て安ら強く我に復りしかば。信乃は夥兵に索を取し嚢頭巾の施米とともに腰に纏てありけるをぞ。夥兵に預る折又餘の夥兵們に指し示。

徳用が這鐵の鹿杖は。後の話柄に做るべし。膂力ある者預りて左も右もなしてもよかるべし。と夥兵們にいひつ。なれども。壮なる者一個して捨んとするに及ばねば。幇助を喚て二人して辛く力を勠して。猶堪べくもあらざら。毛野は笑ふて推禁めて。無益の所為に骨を折りて。闇ねくとらむよりぞ。其まゝ仮にて乗にふけり。登時又大角は件の夥兵們にうち向ひて。汝們知れるや。約莫器械は使ふ者の膂力より。二三等軽きを利とするぞかし。譬ば持里すまで騎馬の挣ぎ自由ならず。遂に不覚を取るとあり。壁言は蜀漢の関雲長が。八十二斤の青龍刀を使ひしより。三尺の童子も知れり。然れども那関羽に百二三十斤の膂力あらずば。八十二斤の器械を馬上自在に使ふことは得做しかたし。技にてそと思ふ者は。四十斤なるべし。然ば這徳用は六十斤の膂力あらんに。使ふ所の鉄杖も亦六十餘斤なるべく。不覚を取りしもその故なるべし。と諭せば。信乃はうち笑て辯論宜定なるその理ある徳用はヨヌ力あり且武藝あるものにあらねども兵法を知ざれば。我と両度の廝殺に不覚の同士軍するとあるは。就て亦一奇事なる方僅徳用と倶に埋伏して洒家を鏖さんと欲りし。謬て徳用に鏖殺されたる這道人を事果て後によく視れば。これぞ舊怨ある者なる犬山和殿は忘れし歟と問へば。道節は即立寄て道人の死貌を熟視て頭を掉て

咱們はかくまでくわしく聴て退けば。荘介も野大角現八小文吾も立登りて屍骸を覩て。作麼這道人は何等の故に犬塚和殿に舊怨あるやと詰り問へば信乃が答ふる其義は豫て各に解示すべかりしが今又思ひ合さるゝ這奴は則別人ならず。那甲斐の猿石なる四六城木工作が小厮で出来介と喚れし者なり。裏面に名字を世諺さまぞ酒家と誣て。不軌淫奔の證人なりしかど。其の伎倆なき發覺れて名實が死刑に處られし折這奴は追放せられしが是よりの後那里に在るや知るよし絶てなかりしに。今この地にて這奴が故郷なる欲然として流れ来にける歟今又我を撃んとして同士戮をせられて身を喪ひしは因果觀面といへども。其の餘も隱匿積惡の餘殃にぞあらんぞかし。蟇崎生に侍ふる那安西出来介は。義侠の與に身を殺して芳しき名を貽すよし。這奴も他と名は同くて善悪邪正死ざるまで雲壌の差ありて。赤是宋魯の曾参が殺めて證言と做されたるこそ然は思はざると解示せば大家驚嘆して。天理彰らかに限ありと亦今ゆくりなかりしとみけり。畢竟信乃が不用意にて斎しける米の来歴を。大隠文們に解示して後の話説甚麼ぞや。且は下の回に解分るを聴ねかし。

南總里見八犬傳第九輯巻之十九終

[illegible]

南總里見八犬傳第九輯巻之十九終